

[コラム・エッセイ]

## ジャマイカ中央山岳地帯の子ども・教育 (1) 川口幸宏

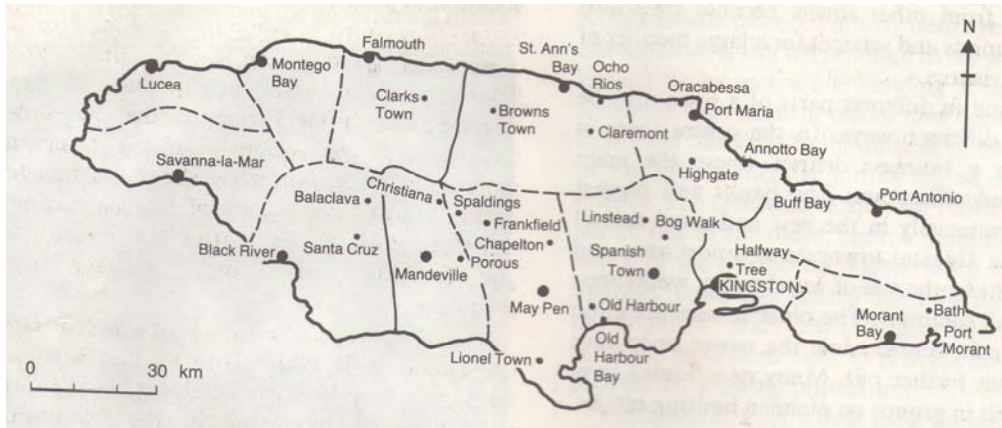
メキシコ湾の南、大西洋に隣接する水域カリブ海に浮かぶ島国、日本の秋田県ほどの面積の国土を持つ人口 250 万ほどの小国ジャマイカはイギリス連邦を構成する立憲君主国である。国王はエリザベス女王。ジャマイカの北方は水深 7684m のケイマン海溝を挟んでキューバ共和国となる。このジャマイカを、2002 年、2005 年そして 2009 年の 3 回、短期の滞在ではあるが訪問し、教育調査を手がけた。以下の報告は、特に 2009 年 12 月に滞在した折の記録である。概括にさえ及んでいないが、お許し願いたい。

”Jamaica: Citizenship and Government” (中等教育用社会科教科書) によればジャマイカの現在は多人種で構成されている、とある。ヨーロッパ系、アフリカ系、東インド系、中国系、その他の人種が例示されている。しかし、これらの中でも Afro-Jamaican と称するアフリカ系黒人が国の人口の 80% 強を占めていることを失念してはならないだろう。そのほとんどがヨーロッパによる労働奴隷として売買され、この島に強制移住させられた先祖を持っている。ちなみに奴隷制度下にあった 18 世紀後半には約 2 万人のヨーロッパ人に対して約 30 万人の黒人奴隷がいたという。そして、黒人奴隷たちは、アフリカンとしての言語使用は禁じられ、15 世紀末からスペイン語、続いて 17 世紀半ばからの 300 年ほど英語の会話能力を強いられ続けてきた。言葉を換えて言えば、ジャマイカの人口マジョリティの Afro-Jamaican は、ヨーロッパ文化に隷属させられてきたわけである。

だが、その長い歴史の中で、彼らは、独自の文化を形成することがなかったのだろうか。そんな稚拙な「問い」を私は持ち続けてきた。レゲーやラスタファリン等のほか、支配文化を自身にオリジナルな生活文化に変容することはなかったのだろうか。

ふとしたきっかけで Afro-Jamaican に固有の生活語 (Jamaica Talk あるいは Jamaican Patois) の文字化の活動があることを知り、それらの活動が学校教育と結びついているのか否かの問題を中心にした教育研究を進めたいと願っていた。3 度のジャマイカ訪問の主たる目的はこのようなところにあった。残念ながら、今のところ、この目的は果たせていない。しかし、国家として独立したのが 1962 年と非常に歴史が浅いということが子どもの生活や教育にさまざまな問題を浮かび上がらせているという事実を知るにつけ、私たちが歩んできた生活・教育の道を今一度振り返ることに資することが大いに可能であると、今は確信している。

## ジャマイカ中央山岳地帯の子ども・教育 (2) 川口幸宏



ジャマイカでの研究フィールドを中央山岳地帯にある Clarendon 県の小都市 Frankfield の奥地山間集落に定めた。たまたまホームステイ先がそこで得られたということもあるが、何よりも大きな理由は、奴隷解放を目指して中央山岳地帯にこもって活動した Maroons と呼ばれる者の存在であった。その活動が一定実を結んだのは 1838 年のこと。しかし黒人たちは貧困であり続けたという。そういった歴史の「残り香」に触れたい、その一滴である Afro-Jamaican Patois に接したいと願った。

ホームステイ先の Davis 家はかつてはサトウキビ等の農園を経営していた。現在は元高校教師であった女主が、その職能、教養を生かして、公務労働に従事している。ココナッツ、マンゴー、オレンジ、バナナ、パン、アキ等々南洋果実の木々が生い茂る広大な庭を持つ、山脈中腹の高台の小さな集落の中に館は建つ。この集落の人々が、日常は家政婦、祭礼時の山羊等小動物の屠殺者、その他諸々の所用で、Davis 家に入出入りする。私がたわわに実をつけているココナッツの木を見上げていると、逞しい男性が話しかけてきた。まったく聞き取れない。弁護士をしている Davis 家の息子が笑いながら、「ココナッツをもういできましようか、と Afro-Jamaican Patois で言っていますよ。」と教えてくれた。彼は写真(右)のごとく命綱もなくスッスッと上り実を一つもいで降りてきた。



[コラム・エッセイ]

## ジャマイカ中央山岳地帯の子ども・教育

(3) 川口幸宏

この集落や近在には公共機関を始め商店もない。それらを利用するためには山を下りなければならない。3度の滞在期間中、たった一度だけ、「移動商店」と出会ったきりであった。それもアイスクリーム売り。日用品は、不便を押して、町での買い物となる。路上売店、掘っ立て小屋のような売店等々、大・中都市商店とはまるで異なる(上から2枚目の写真は理髪店)。

私は都市の文明(学校、図書館、デパート、スーパー等)を求めて歩くよりも、山村の人々が生活の必要から生み出した素朴な文化を求めて歩くことが多かった。

Davis家に連日顔を出して力仕事をしている男性。カメラを構えると「力強い男性像」を演出してくれた。彼の右手には山刀が携えられている。言葉が通じないと理解した彼は、あれこれと身振りで教えてくれた。「こうした木枝を切るんだよ。」つまり、下刈りやら枝払いやら、山村生活に欠くことのできない道具である。道で出会う成人男性の手に必ず携えられていた。手に持つとブリキ製のように軽い。その次の写真は手作りの台車。井戸も水道もない山村で生活水の確保は雨水の溜置きと沢の水。彼はこれから沢で汲み、道端に運び上げた水瓶を取りに行くところ。沢は時に洗濯場と化す。その沢では10人ほどが服を着たまま水浴びをしていた。

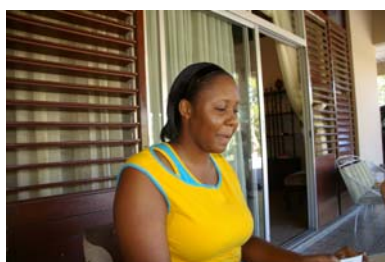
ジャマイカの道はほとんど舗装されている。しかし、穴がでこぼこに開いている。補修の順番が回ってくるのに時間がかかるとの嘆きを聞いた。その道を行き交うのは人と車だけではない。引き綱を引きずったまま独歩するロバ、山羊等の家畜道路にもなっている。また、都会人が車から投げ捨てた「金目のもの」を拾い集め、生活の足しにしている子どもの光景も目につく。こうした子どもの多くは裸足である。



[コラム・エッセイ]

## ジャマイカ中央山岳地帯の子ども・教育 (4) 川口幸宏

Davis 家はジャマイカの中層以上の階層に属する。邸宅は典型的な Clarendon の farmer's house である。この家から自立した息子・娘は、イギリスやアメリカに渡る者もあり、それぞれが中層以上の社会階層を形成している。農園経営、医師、弁護士、コンピューター技師など。



ある日、Davis 家に近在の子どもたちに集ってもらい、彼らの将来像を尋ねた。小学生から高校生までの子どもである。

ジャマイカの(準)義務教育年齢は6歳から12歳。つまり日本の小学生に相当する。中・高は「ハイ・スクール」と一括して呼ぶ。やんちゃめがねを掛けた小学生が語る将来像は「首相」。クルクルの頭髪を紙で巻いている女の子は「保母」。幼い妹の相手を毎日しているのでそう考えるのだそう。小学校高学年の男児(写真:2列目右端)は弁護士、しかも国際弁護士だという。

Davis 家から弁護士を輩出していることに影響を受けているのだろう。唯一の高校生の女の子(写真・上列中)は「看護婦」を目指している。中学生の男子(写真:上列左)は医師。ともに、この無医村の実情からどうしても社会の役に立ちたいと強い信念を持って語ってくれた。その他、コンピューター技師、国会議員。

この子どもたちの夢がそのままに実るにはあまりにも厳しい現実が待ち受けている。

[コラム・エッセイ]

## ジャマイカ中央山岳地帯の子ども・教育 (5) 川口幸宏

ジャマイカ社会では家庭のほかに、学校と教会とが「非常に重要な共同体」だとされている。村(Villages)・町(Towns)・市(Cities)という行政共同体の規模に応じ、例えば、一村には2教会、1 basic school, あるいは1 primary school、あるいは1 all-ages school が設置されている。1 Town には secondary schools、1 City には高等教育機関・・・という具合である。Davis 家に集まってくれた子どもたちは、少なくとも山(Village)を降り、Town という小都市、City という大都市に出なければ彼らの将来は約束されることはない。参観ができた学校のレポートの前に、公立(国立)ではなく、私的な努力を傾けて営まれている職業技術訓練学校を紹介しよう。



クパルマー氏を事業代表とする「望みの技術訓練所」。氏はカナダからの移住者だという。

家庭が貧困等によって就学・修学が十分でなくドロップ・アウト

を余儀なくされている青年たちに職業技術を習得させ、国家資格を得させることによって、就業の機会を拡大するという Project を語ってくれた。運営は有志集団(理事会)によ

ってなされている。Davis 夫人も理事の一人である。指導は篤志の専門家スタッフによっている。施設・設備は、可能な限り、生徒たちの手作りによって整えているとのことだった。



訓練される技術は、理容・美容、木工、金属加工、コンピュータである。校舎内には、技術訓練室、授業室はもとより、図書室・閲覧室・ランチ

ルームも整えられている。(写真は理容・理髪実習室と建具制作室)

クパルマー氏は「生徒たちは自分たちが育った村や町の力になりたいと強く願っています」と語ってくれた。

右は理容・理髪科の修了記念写真。校長室に飾られていたのを複製させていただいた。自身とコミュニティーの明日を実践的に夢見るこの子どもたちに栄えあれと祈らずにはいられない。



右上の写真は Flankfield primary school の外壁内側に描かれていた標語である。この標語 Every child can learn, Evry child must learn は、ジャマイカ国内のどの小学校にも掲げられている。



子どもに向けて発信されていることが分かる。そして、その下（写真右）のフランクフィールド小学校のシンボル絵は、地域（親）や教師に向けてであろう、外部から目立つところの外壁には「教育は成功の鍵である。」と訴えている。この標語に限って言えば、他のところでも見る事ができた。



クリスマス休暇にぶつかったため、日常の教育活動の参観は不能であったが、校舎内の見学は許された。カウンセリングルームの壁面いっぱいに貼られたポスターに目を奪われた。薬物の危険性を訴える「安全教育」の一環である。



各教室のドアには創意工夫が凝らされ、子どもたちを出迎えている（左の兎の絵）。残念ながらここは施錠されており入室できなかった。だが、下の低学年クラスの写真で分かるように、教室内も子ども(学習活動)に対してフレンドリーである。”We would gladly welcome any help we can get.”という校長の言葉を室内



情景が雄弁に物語る。そして、クラス・コミュニティの秩序は学習を保証するものでなければならない、とも校長は強調する。このこともまた各地の小学校で語られる言葉である。他の小学校もほぼ同じであった。

[コラム・エッセイ]

## ジャマイカ中央山岳地帯の子ども・教育 (7) 川口幸宏

集落を離れた、わずかに開いた平地の サトウキビ畑の一角が切り開かれ、バスケットコートが設えられていた。そこで子どもたちがサッカーを楽しんでいる。「子どもたちの将来はなにも知的能力を測るだけの学力観ばかりではない、スポーツ能力もまた重要な学力であるべきだ」という「学力論争」がなされている新聞記事を見た。サッカーに興ずるこの子どもたちにこの論争はどのように届いているのだろうか。



その一方で山峡の片隅で、あるいは大都会周辺で、その日の糧さえ得るのに呻吟している人々がいる。そしてその子どもたちがいる。写真上の左隅に写っているのは3歳ほどの女の子。裸足で人形と戯れている、独りぼっちで。私はその子と会話を試みたくて仕方がない。だが私はその子の身体文化を理解する能力を持たない。せめて、文字化された Afro-Jamaican Patois に接することができれば、少しは彼女に近づけるのだろう。

[Edwin Allen Comprehensive High School より提供を受け参考とした資料、その他]  
“The New Integrated GSAT Social Studies Workbook”, “Jamaica: Citizenship and Government”, “Language for Living”, “Religious Education”, “Understanding Jamaican Patois”, etc.